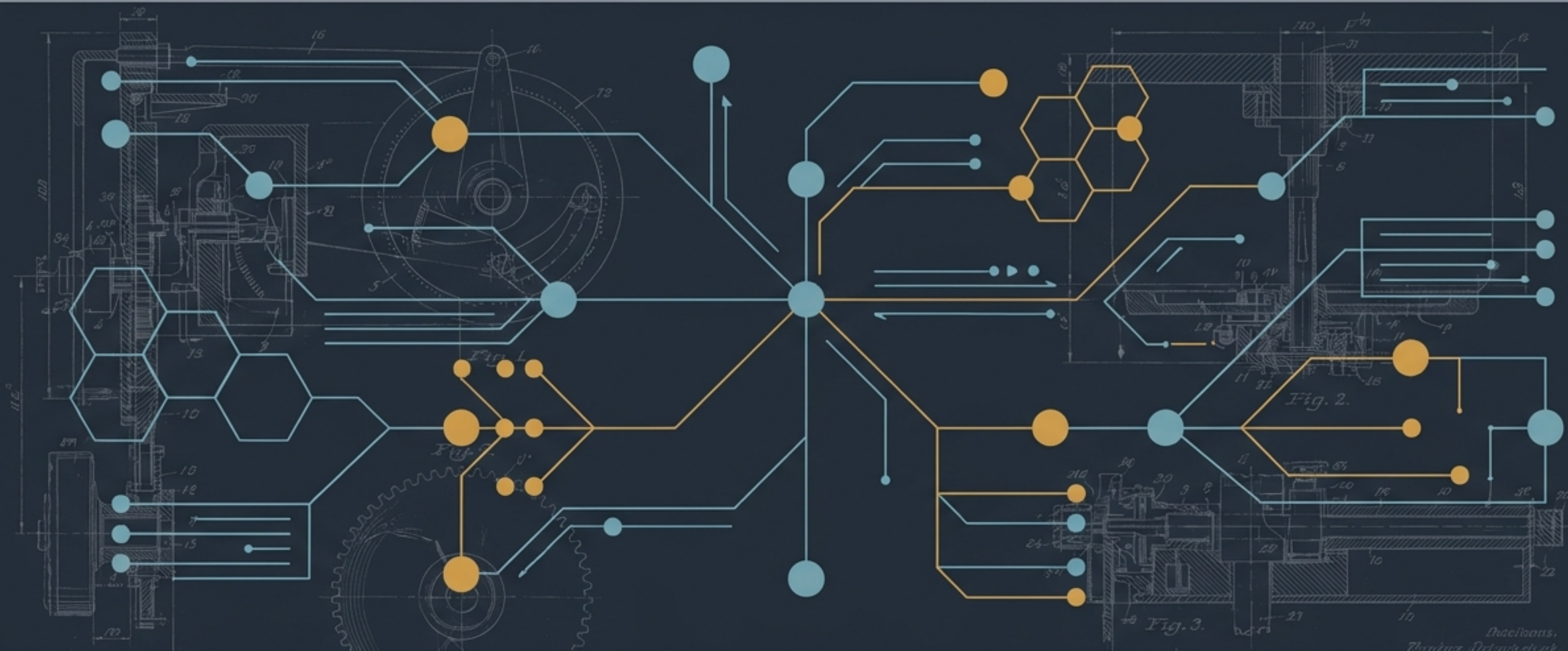




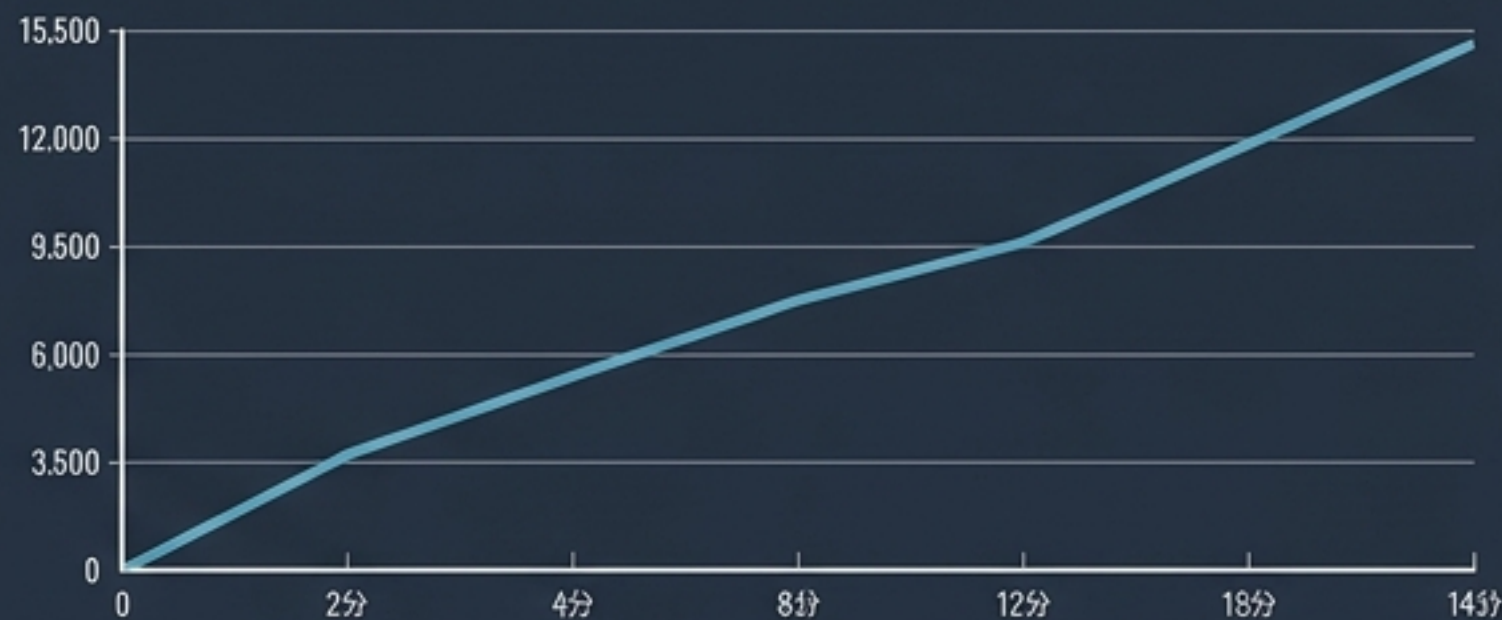
2026 知財・情報フェア&コンファレンス 閉幕後調査と考察

生成AIの実装フェーズにおける展示トレンドと、実務導入への羅針盤

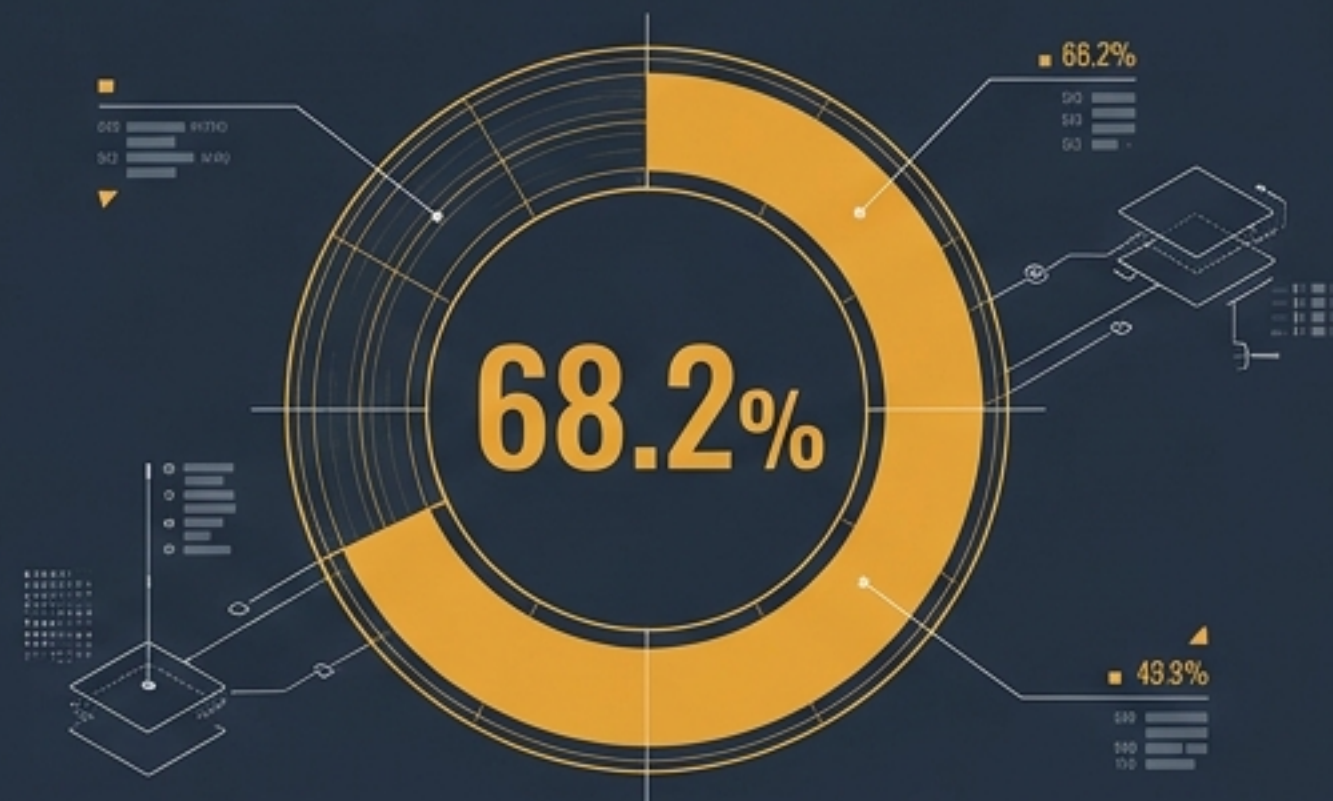
独立調査報告 | 2026.09.19

累計来場者数

15,502名 (+1.9% YoY)



AIテーマの圧倒的存在感

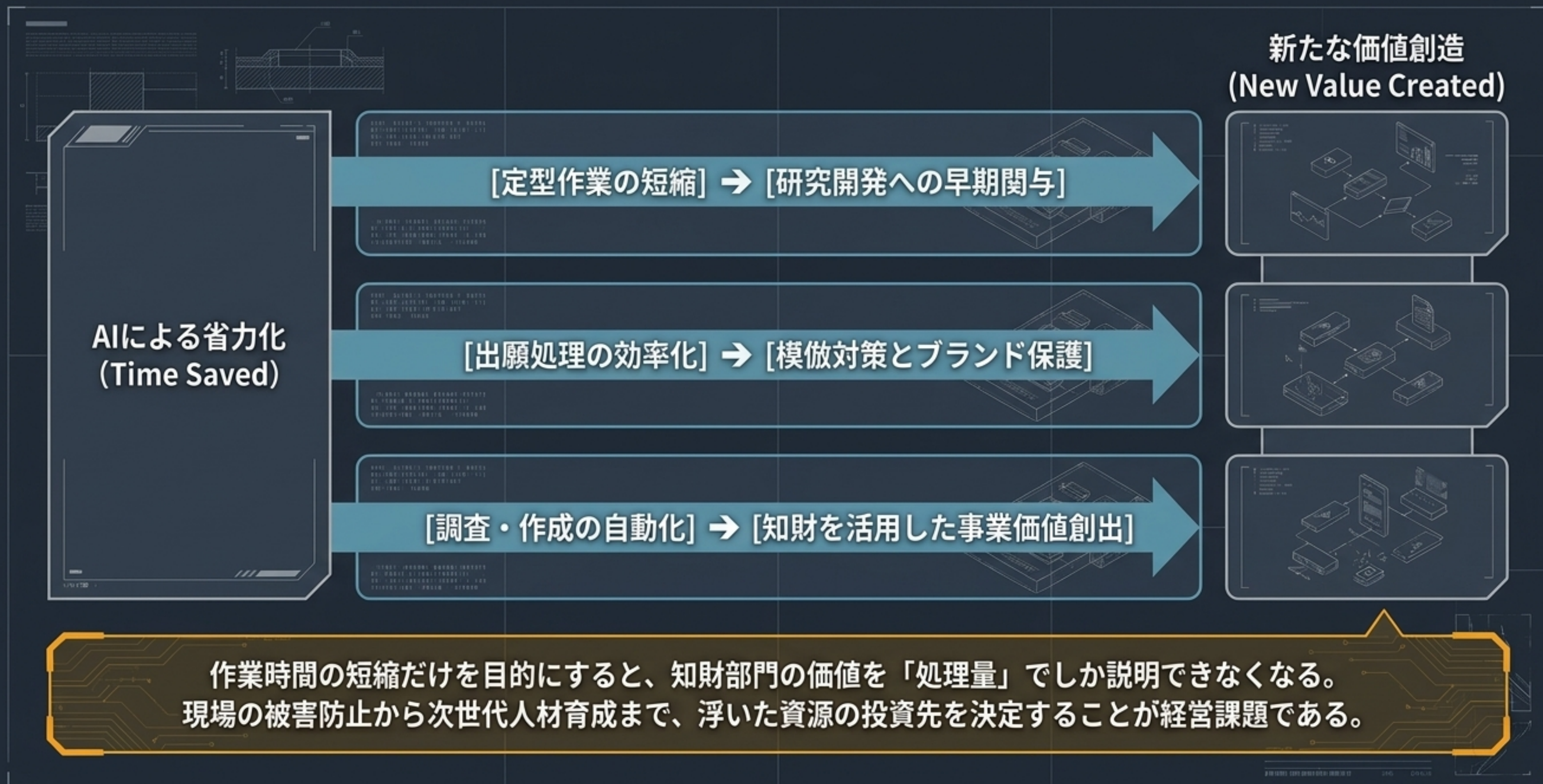


出展者プレゼン107枠中、73枠がAI/LLM/MCP/生成に言及

AIはもはや差別化要因ではなく、共通の前提である。
主戦場は『単体ツールの導入』から
『既存業務・組織への統合』へと完全に移行した。



戦略の転換：省力化後に「何を増やすか」が問われている



トレンド1 | 特許調査・分析（生成スピードから「検証過程」の競争へ）

ブラックボックス型AI

入力

内部処理
[見えない]

要約出力

透明性+専門家ループ型AI

入力

検索式/
母集団の設計

専門家による
検証ノード

要約出力

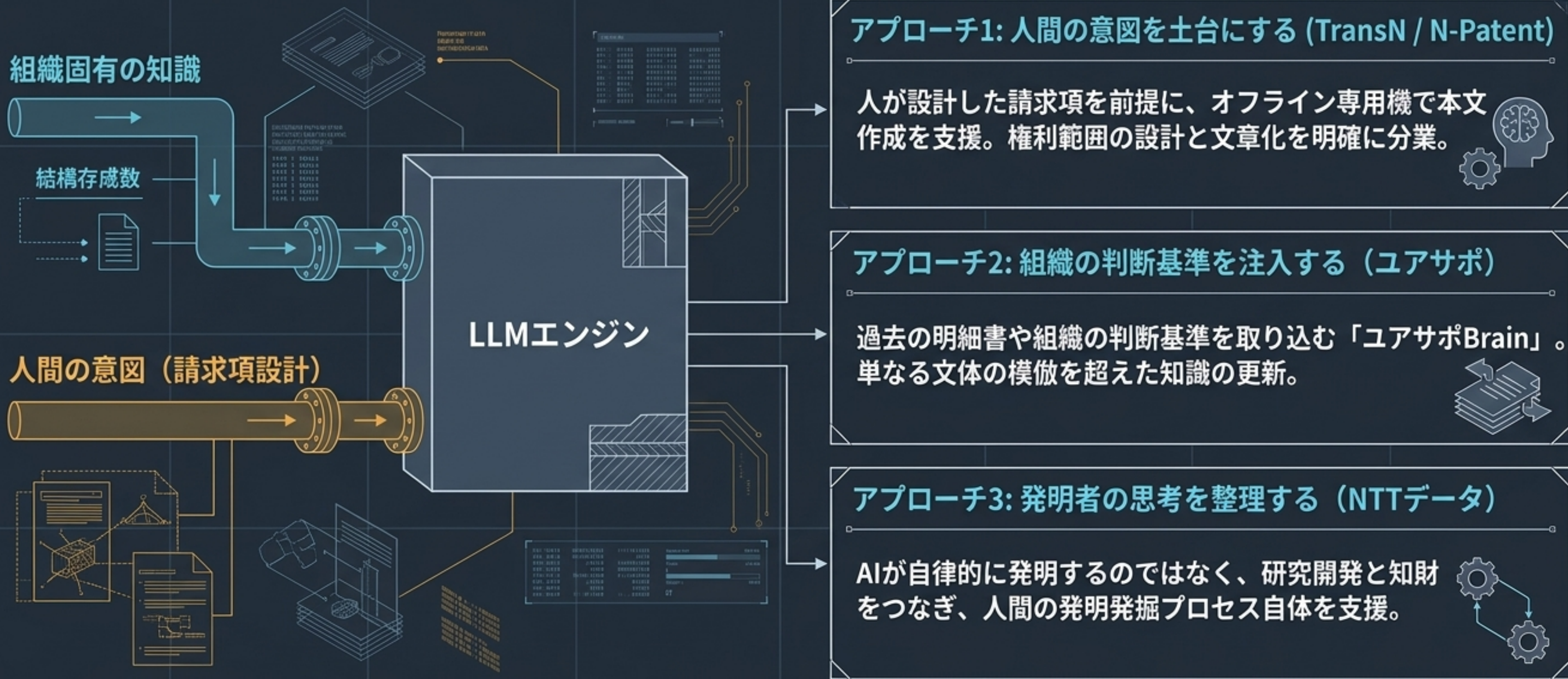
CAS / 化学情報協会:
調査過程の可視化と専門
家支援 (SHIPS) の統合

LexisNexis:
自然言語による
分析設計の支援

サマリア:
調査目的と該当・非該当の
「評価基準」の人間による設計

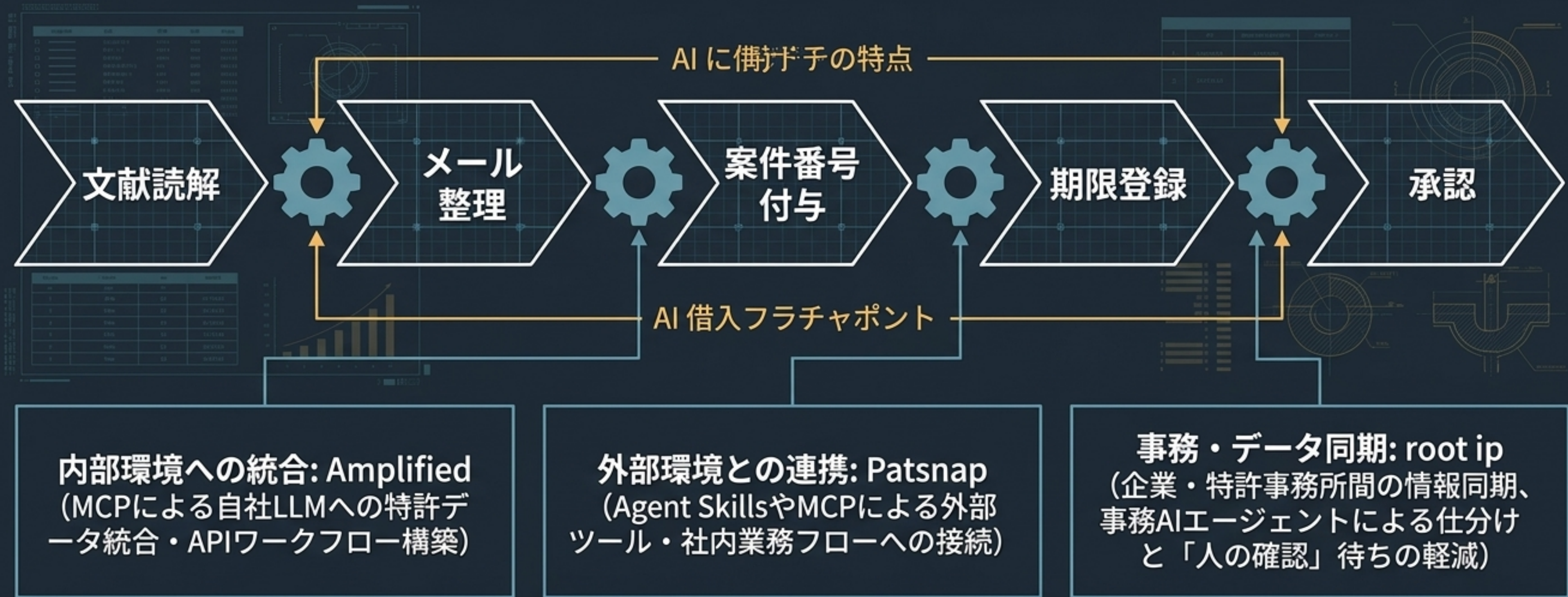
「大量の文献を美しく要約できても、最初の母集団から重要文献が漏れていれば、後工程のAI要約では絶対に補えない。判断に至る工程全体を評価すべきである。」

トレンド2 | 発明発掘・明細書作成（「全自動」から「組織知識の統合」へ）



⚠ 作成速度が上がるほど、誤った前提や発明者の意図とのズレも高速で文書化される。参照情報の選定と誤りの訂正設計が不可欠。

トレンド3 | エージェントの時代（単一画面から「業務フロー全体」へ）



「効率化の最大のボトルネックは、タスクそのものではなく、作業間の『データの転記・受渡し・確認待ち』に移行している。」

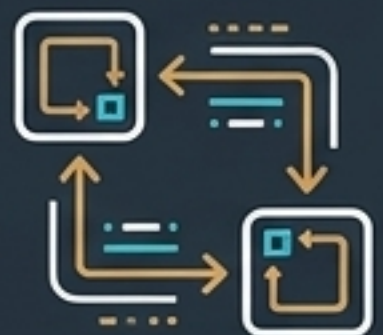
アーキテクチャ比較：運用設計とシステム統合の選択肢



1. 統合プラットフォーム型 (Integrated Platform)

代表例: Anaqua, Clarivate

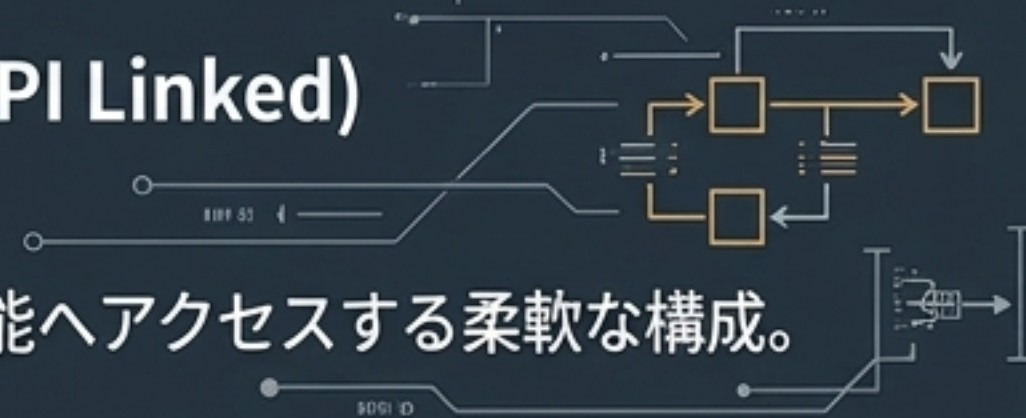
管理基盤を中心に情報を一元化。グローバルな統制と一貫したデータ管理に優れる。



2. 外部API・エージェント連携型 (External API Linked)

代表例: Amplified, Patsnap

自社の既存AI環境 (LLM) から外部の特許データや機能へアクセスする柔軟な構成。



3. 内製化支援・特化開発型 (In-house Customization)

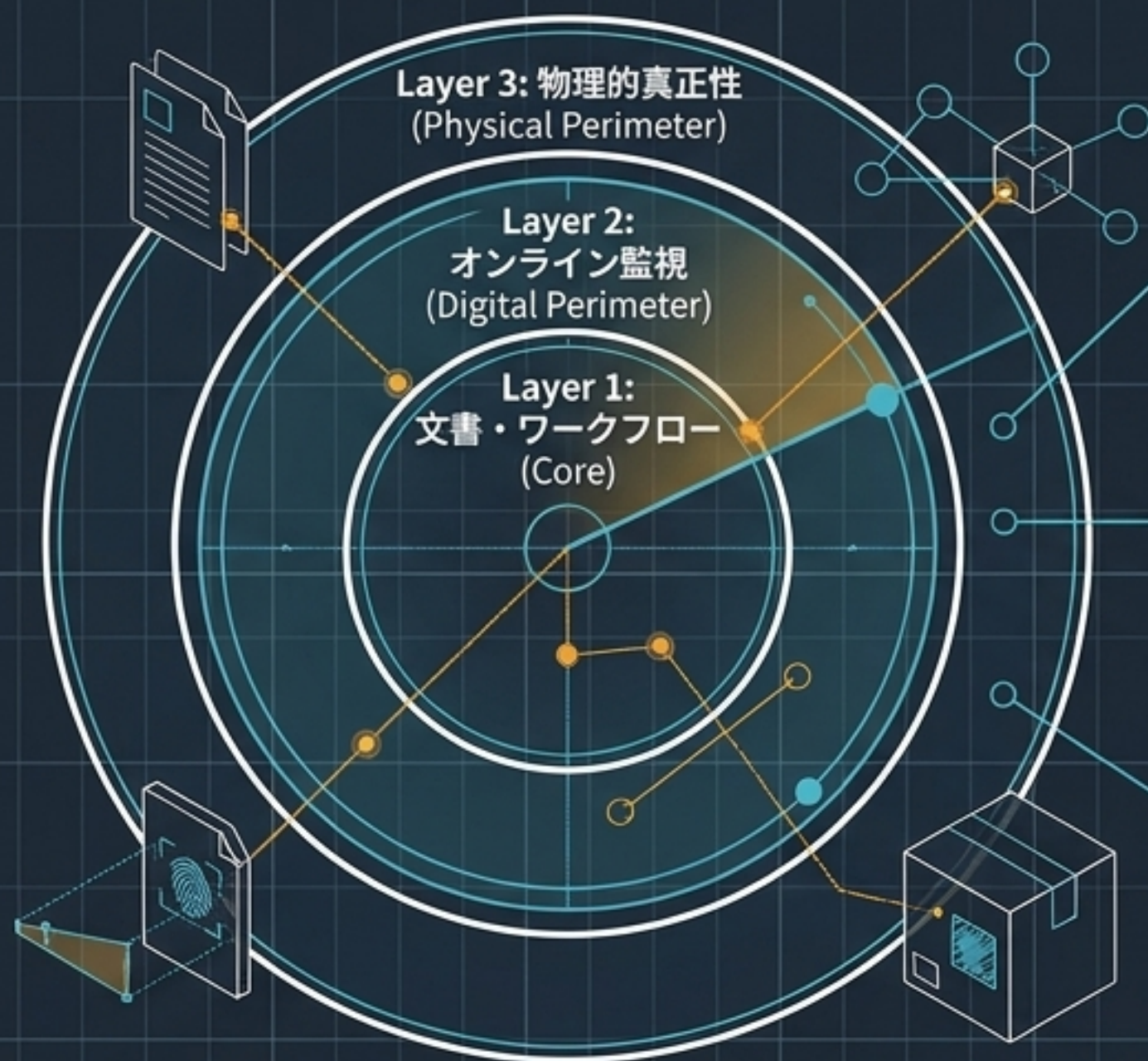
代表例: AIDAO

現場に伴走し、企業固有のプロセスに合わせてAIを実装。継続的な自己改善能力の構築に優れる。



選定の判断軸：維持費 | 必要な情報統制レベル | 社内ITシステムの支援体制

トレンド4 | ブランド保護（拡大する防衛線と多様化するアプローチ）



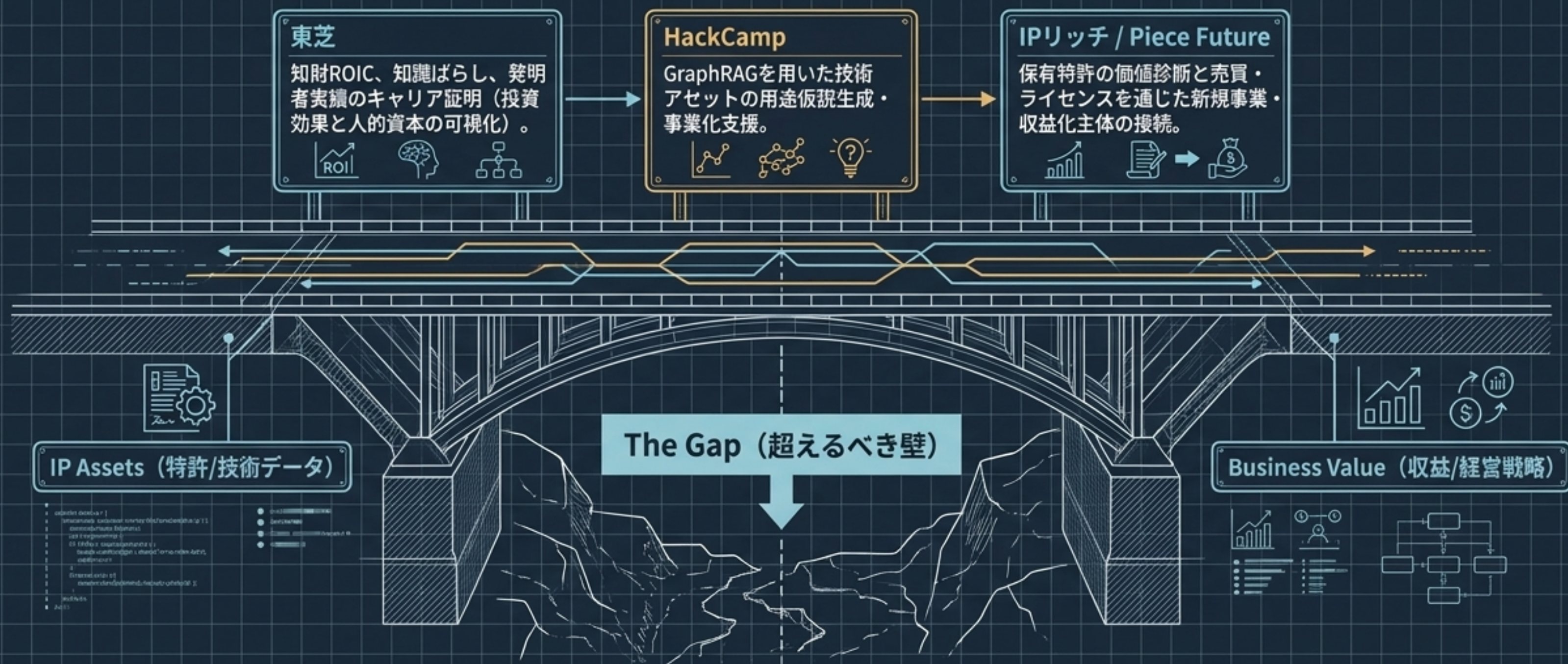
Japio（商標スキャナーによる文書中の商標検出）、IPオアシス（社内外の商標調査ワークフロー改善・工数削減）

MarqVision（AIエージェントによる模倣品・不正流通の検知と削除対応）、GMOブランドセキュリティ（ドメイン管理とAI検索・分析連携）

大日本印刷 [DNP]（ホログラムとスマートフォン認証による現物の真贋判定）

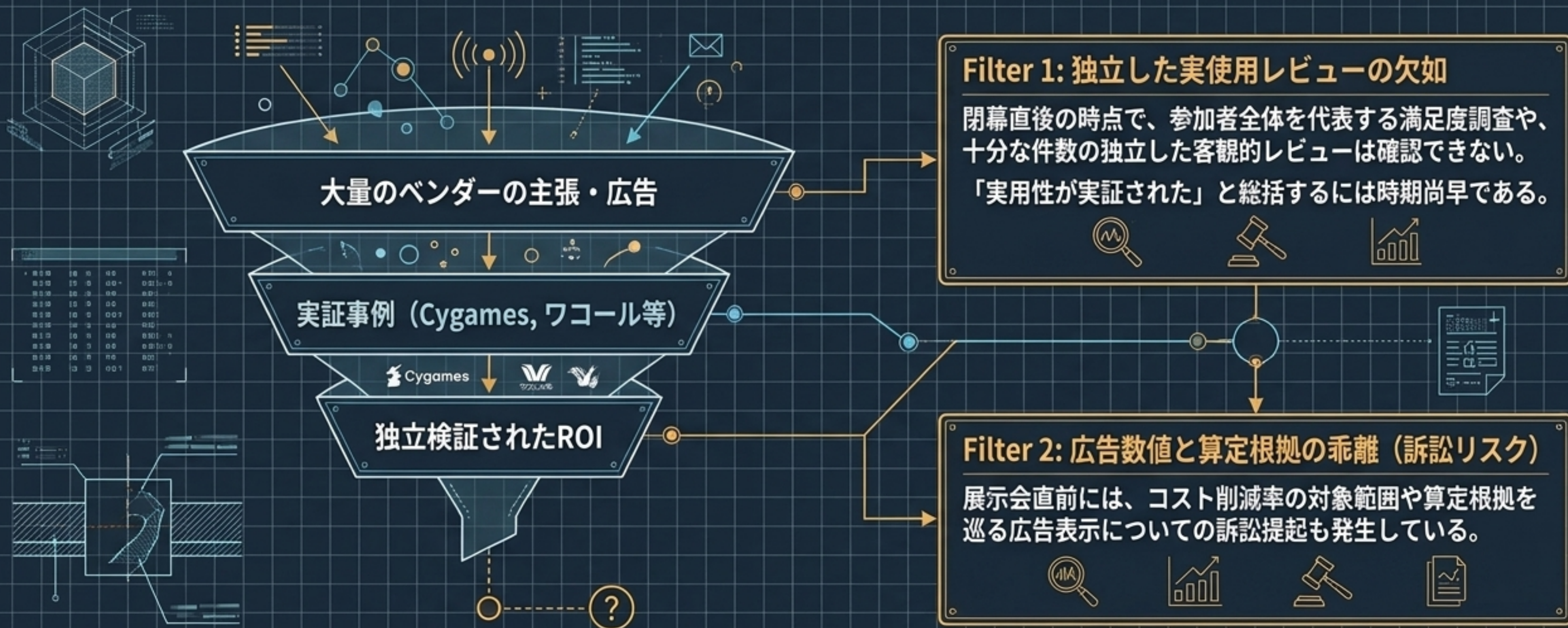
「AIブランド保護」という一語で括るべきではない。OCRの文字検出と図形の類否判断は異なり、オンライン監視と物理的眞贋判定も目的が異なる。課題領域を正確に見極める必要がある。

トレンド5 | 知財経営と事業化（技術アセットから財務指標への接続）



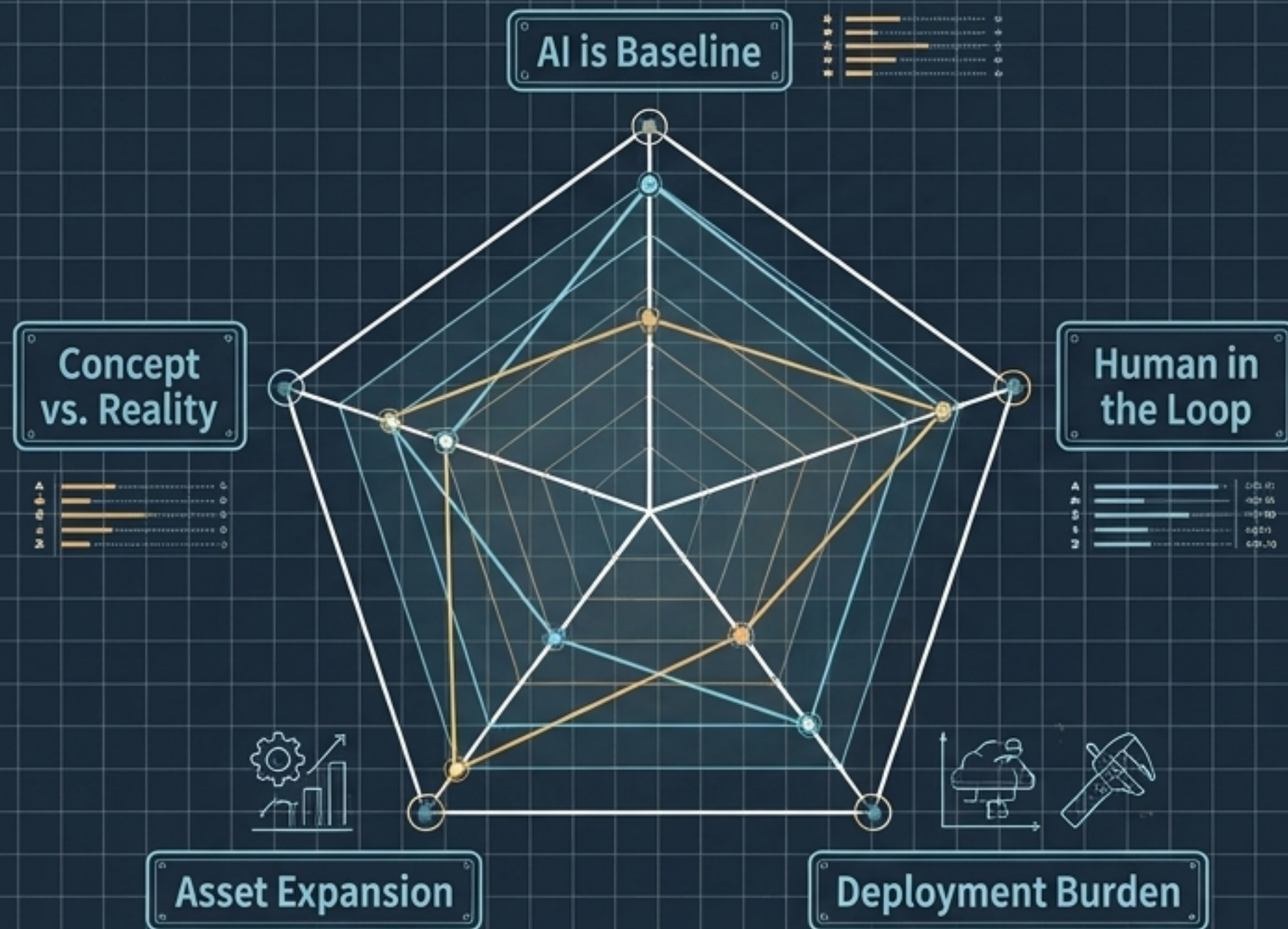
価値の「可視化」と「実現」は異なる。AIが特許の評価指標（スコア）や用途候補を生成することと、それが実際の因果関係として会社の利益（売上）に直結することには距離がある。経営判断にどう組み込むかが鍵となる。

評判のリアリティ・チェック（マーケティングの熱狂と事実の分離）



削減率を比較する際は、必ず「分母を揃える」こと。文書生成時間だけでなく、事前の調査設計から専門家による最終確認・修正までの「総工数」で比較しなければならない。

知財AI実装における「5つの戦略的次元」(The 5 Dimensions of IP AI)



1. AI搭載自体は共通前提。
差別化要因はデータの質と対象業務の適合性。
2. 人間の専門性は「不要」になるのではなく、システムの「設計仕様・承認プロセス」として不可欠に。
3. クラウドかオンプレか。導入の選択肢が増えた分、情報統制・保守などの「運用設計負担」が増加。
4. 対象範囲が「特許の処理」から、ブランド保護や投資効果など「企業資産の活用」へ拡大。
5. 参考出展・提供予定と、稼働検証済みの機能との間にある「実証度」のギャップ。

ツールは既に揃いつつある。真のボトルネックはAI技術ではなく、AIを統制・管理するための「組織設計」にある。

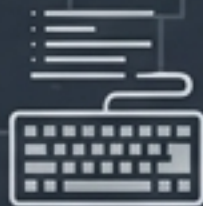
知財専門家の役割の再定義 (The Reimagined IP Professional)

Traditional Role (The Processor)

- 検索者 (Searcher) :
文献を自ら読み込み抽出する



- 起案者 (Drafter) :
ゼロから文章をタイピングする



- 管理者 (Administrator) :
手動で期限やデータを同期する



AI-Augmented Role (The Architect)

- プロンプト・アーキテクト :
調査目的と評価基準を設計し、
AIに注入する



- 検証スペシャリスト :
出所の追跡と、生成物の品質・
意図の合致を審査する



- ビジネス・インテグレーター :
浮いた時間を研究開発への関与や
事業戦略に再投資する



「人の専門性を使う箇所が、製品設計のコアに現れている。
専門家は『**処理者**』から『**システム設計者および検証者**』へと進化する。」

バイヤーズ・ダイアグノスティック・マトリクス [導入前評価編]

評価軸	導入前に確認すること	評価に使う記録の例
業務への適合 (Task Fit)	先行技術、無効資料、FTO、作成等、目的ごとの対応範囲。	実案件の入力、期待する成果物、対象外作業。
品質 (Quality & Omissions)	重要文献の見落とし、誤った根拠、記載の欠落、翻訳の意味変化。	既存の確認済み案件、専門家の修正内容。
検証可能性 (Verifiability/Traceability)	出典、検索条件、対象データ、判断理由を追跡できるか。	調査履歴、参照箇所、版・条件の記録。

1				
2				
3				
4				

バイヤーズ・ダイアグノスティック・マトリクス [導入後・運用評価編]

評価軸	導入後に確認すること	評価に使う記録の例
総工数・総費用 (Total Cost/Time)	入力準備、生成、確認、修正、連携、保守のすべてを含める。	工程別の実作業時間、利用料、開発・教育費。
情報管理 (Information Mgmt)	外部送信、学習利用の有無、保存、削除、権限、障害時の扱い。	契約条件、システム設定、アクセス・操作記録。
組織への定着 (Adoption)	担当者が替わっても利用でき、AIの誤りを継続的に改善できるか。	利用率、引継ぎ手順、問い合わせ履歴、再発防止策。
事業への効果 (Business Impact)	短縮した時間を、どの高付加価値活動に振り向けたか。	開発への早期関与、経営判断の早期化、知財活用案件の進展。

次のステップ：誇大広告を超えて実務へ実装する3つの命題

1. 小さく比較し、 必要な範囲へ広げる

まずは課題が明確な業務を一つ選び、既存手順と候補サービスを「**同じ案件・同じ品質基準**」でテストする。

2. 削減率の「分母」を揃える

AIの文書生成時間だけを比較してはならない。入力資料の準備から、**専門家による最終確認**に至るまでの「**総工数**」で比較する。

3. 効率化「後」の仕事を あらかじめ定める

ツールを買う前に、**創出された余力を何に使うか**を定義する。**人員削減ではなく、事業への貢献**として成果を測る。

「展示会の熱狂やカタログスペックではなく、自社環境における『検証された結果』を優先せよ。」